



ピース・トーク・マラソン in 兵庫

～ 1人ひとりにできること。1人のためにできること～

With

国際防災・人道支援フォーラム 2005 ～大災害を語り継ぐ～

独立行政法人国際協力機構(JICA)は、「1人ひとりにできること。1人のためにできること」をメインテーマとして、平和や国際協力に関する問題提議を2003年から2007年までの3.5年計画で継続してきており、2005年1月には、国連防災世界会議にあわせて神戸で開催し、多くの市民参加のもと、防災の国際協力についてもその論点とすることとしている。

国際防災・人道支援協議会(DRA)と兵庫県は、平成16年2月8日(日)神戸国際会議場において、「大災害を語り継ぐ」をテーマに「国際防災・人道支援フォーラム2004」を開催し、フォーラム参加者と国際防災・人道支援協議会構成員は、総意の下でこのフォーラムの成果を「議長サマリー」としてとりまとめ、特に市民レベルで「大災害を語り継ぐ」ことの重要性や有効性について国際社会へ提言を行った。

こうした流れをふまえ、様々な市民レベルでの国際平和や国際防災協力活動への思い、市民ひとり一人が大災害の経験を風化させることなく「語り継ぐ」ことの重要性を確認するため、2005年1月のWC DRにおける、阪神・淡路大震災総合フォーラムのオープニングとして「ピース・トーク・マラソン in 兵庫～1人ひとりにできること。1人のためにできること。～with 国際防災・人道支援フォーラム2005～大災害を語り継ぐ～」を開催した。

記

全体概要

- 1) テーマ:「1人ひとりにできること。1人のためにできること～大災害を語り継ぐ」<総合フォーラムの第2セッション>
- 2) 参加対象:一般市民等。さらにWC DR参加者(各国政府、国際的機関、専門家、関係省庁、自治体等)にも参加を求める(全体で約600人)
- 3) 使用言語:日・英(2か国語)同時通訳
- 4) 開催時期:平成17年1月18日(火) 15:25～18:00
- 5) 開催場所:ポートピアホテル ポートピアホール
(〒650-0046 神戸市中央区港島中町6-10-1)
- 6) 実施体制
 - 主催:国際協力機構(JICA)、神戸新聞社、全国地方新聞社連合会、内閣府、国際防災・人道支援フォーラム実行委員会(兵庫県、国際防災・人道支援協議会(DRA))



▶ 後援： UNESCO、外務省、神戸市、共同通信社

7) 開催経費： JICA と DRA(兵庫県負担金、阪神・淡路大震災周年記念事業補助金)により負担

8) プログラム(知事・大臣出席の全体開会式、貝原前兵庫県知事の基調講演等のあと)

15:20 ~ 15:35 オープニング(10分)

世界の現状を写真でつづる

15:35 ~ 17:05 事例紹介・パネルディスカッション

「大災害を語り継ぐ」(90分)

- ✓ コーディネーター：山口 一史(ひょうご・まち・くらし研究所常務理事/元神戸新聞社論説委員、ラジオ関西社長)
- ✓ パネリスト：
 - ・ 斉藤 容子(海外災害援助市民センター：CODE)
 - ・ 金 千秋(FMわいわいDJ)
 - ・ Ms.トゥルン・バシュトゥルク(アダパザル市長補佐官、トルコ)
 - ・ Dr. ヒュー・デイビス(パプアニューギニア大学教授)

昨今の世界の大災害の概要を紹介し、それぞれの被災地の市民が、その災害の経験や復興過程について、どのように後世や他地域に語り継いでいるかについて報告があった。

それを受けて、大災害の被災経験、そこで実際に展開された市民レベルでのひとり一人の活動や貢献、それらの経験や復興過程を風化させることなく後世や他地域に語り継いでいく取り組みの意義・重要性等を論じ、そういった国際的な支援活動も個人の力がベースとなっていることを確認した。さらに、ひとり一人の力を結集し、有効に機能させるためには、そのような活動のコアとなる施設や組織、そのネットワークが重要となることにも言及された。

17:05 ~ 17:15 休憩(10分)

17:15 ~ 18:00 ピース・トーク「1人ひとりにできること。1人のためにできること。」(45分)

- ・ 藤原 紀香(女優)
- ・ 田中 章義(歌人、ワールドユースピースサミット平和大使)
- ・ 谷口 隆太(ジャンプラットフォーム)
- ・ 石倉 美佳(司会進行)

18:00 閉会

**< 参考 >**

国際社会への提言内容（国際防災・人道支援フォーラム 2004 議長サマリーより）

これまで、地域社会や市民の立場からは大災害の総合的な減災政策が進められてこなかった。しかしながら、1995年の阪神・淡路大震災は、被災者からの視点の重要性をあらためて教えてくれた。被災者の視点から「大災害を語り継ぐ」ということは、行政での取り組みと歩調を合わせて、これからの災害で被災者を少しでも減らすことにつながっていく。

そのために、

- 1) いずれの被災地においても、各国政府や人々は、地域における市民の大災害の「語り継ぎ」を事業化する努力を開始すべきである。それによって過去の悲劇を再び繰り返さずにすむことになるのである。
- 2) 「語り継ぎ」を行なうには、展示施設や「語り部」の活動、映像、漫画、音楽、地域のお祭り、その他各種の教育活動など、多くの方法があるが、その最大の長所は、大きなコストをかけなくてもできることである。各国政府や支援機関は、「語り継ぐ」ことの重要性を理解し、これに対する支援を是非始めていただきたい。